

【復活のトロパリ 第7調】

パリストスか神みよ、なんぢはじゅうじかにてしを死
ほろぼし、とうぞくのためならくえんをひ開
らき、けいこうちよのかなしみをなぐさ慰
め、しとになんぢがふくかつして、せか世界
いにおおいなるあわれみをたまいしをつたえ傳
させたまえり。

【日本の亞使徒聖ニコライのトロパリ 第4調】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう忠
使徒等同座
じつにしてしんちなるパリストスのえきしゃ、せい聖
實神智
なるしんにえらばれたるふえ、パリストスのあい愛
神撰
にみちたるうつわ、わがくにのこう光
満器
しょうしや者、あしとしゅきょうせいいニコライ
照亞使徒主教聖

よ、なんぢのぼくぐんのた爲め、および
爾羊群爲及

ぜんせかいのために、いのち命をた賜もうせい
全世界爲及

さんしゃにいのりたまえ。
三者祈給

【 日本の亞使徒聖ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこ子とせいしんにき歸
光榮父と聖神に歸

す、

せいせいしやあしとせいニコライよ、わが
成聖者亞使徒聖

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ
國爾旅人及異邦人受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの
爾初我國於己

れをがいらいしやとしりたれども、ハリストスの
外來者知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて
光暖流し、なんぢのて敵

きをぞくしんのことな爲し、かれらにか神
屬神子爲

みのおんちょうをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
 恩寵 與 教會 建

たり、いまこのきょうかいのためにいのり
 今此教會 爲 祈

たまえ、けだしわれらそのしょしはなん
 給蓋 我等其諸子爾

ちによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼我 善 牧者 慶

べよ。

【復活のコンダク 第7調】

いまもいつもよよ世に、アミン。
 今何時 世世

しのけんはすでにひとびとをとらうるあた能
 死權 已 人 人 捕

わす、けだしハリストスはくだりてそのち力
 蔽 降

からをやぶりてほろぼしたまえり。ぢご獄
 敗滅 給

くはしばられ、よげんしゃはどうしんによろ
 縛 預言者 同心 喜

こびてよぶ、きゅうせいしゅはしんにおる
 呼救 世主 信居

ものにあらわれたり、しんじやよ、ふく
者現信者復
か活つしてい出。

司祭) (黙誦: 聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有

となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾

り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行う者を棄てずして、其救の爲に

痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が

聖なる祭壇の光榮の前に立て、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる

ものしゅさいなんぢみづかわれらざいにんくちせいさんうたうなんぢの者となしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の

仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈

からだせいわれらしうがいぜんこうもつなんぢつとえたませいと體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖

なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、

アミン。

【 聖三祝文 】

せいなる神み、せいなるゆうき、せいなる
聖神聖勇毅聖
じょうせいのものよ、われら等をあわれめ
常生者

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖 神 勇 毅 聖

なるじょうせいのものよ、われら等をあわれ
 常 生 者 我 等 懐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖 神 勇 毅

せいなるじょうせいのものよ、われら等をあわれ
 常 生 者 我 等 懐

れめよ。こうえいはち父ちとことせいしん
 光 荣 父 子 聖 神

にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 歸 今 何 時 世 世

せいなるじょうせいのものよ、われら等をあわれ
 聖 常 生 者 我 等 懐

れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 聖 神 勇

き、せいなるじょうせいのものよ、われら等を
 毅 聖 常 生 者 我 等

あわれめよ。

懐

司祭) (黙誦: しゅなよきものあがほざものなんぢ そのくに
 主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

こうえい ほうざ あり つね あがほ いま いつ よよ
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 プロキメン
 提綱 主日第7調 】

司祭) つしき きくべし、しゅうじん へいあん、

誦經) なんぢ しん 爾の神にも、

司祭) えいち 睿智、

誦經) プロキメン、主は其民に力を賜い、主は其民に平安の福を降さん、

しゅ は そ の たみ に ち から を た ま い 、 しゅ は
主 其 民 力 賜 平 安 の 福 く を く 降 だ
そのたみにへいあんのふ福 さ ん。

誦經) かみ しよし しゅ けん こうえい そんき しゅ けん 神の諸子よ、主に獻ぜよ、光榮と尊貴とを主に獻ぜよ、

しゅ は そ の たみ に ち から を た ま い 、 しゅ は
主 其 民 力 賜 平 安 の 福 く を く 降 だ
そのたみにへいあんのふ福 さ ん。

誦經) しゅ そ の たみ ち から た ま い、

しゅ は そ の たみ に へ い あ ん の ふ 福 く を く 降
主 其 民 平 安 の 福 く さ ん。

【アポストロス
使徒經 221 端 エフェス書2章14節～22節】

司祭) えいち 睿智、

誦經) せいしと じん たつ しょ よみ 聖使徒パヴエルがエフェス人に達する書の讀、

司祭) つつし き 謹みて聽くべし、

誦經) けいてい われら わへい ふたつ もの ひとつ な へだて かき こぼ おのれ
兄弟よ、ハリストスは我等の和平なり、二の者を一と爲し、隔の牆を毀ち、己
み もつ あだ はい おしえ もつ しょかい りっぽう はい こ わへい な ふたつ もの
の身を以て仇を廢し、教を以て諸誠の律法を廢せり、是れ和平を爲して、二の者
もつ おのれ おい ひとつ あらた ひと つく またじゅうじか あだ ころ これ もつ
を以て、己に於て、一の新なる人を造り、又十字架にて仇を殺し、此を以て、
ひとつ み おい ふたつ もの かみ ふくわ ため かつきた なんぢらとお ものおよ ちか
一の身に於て、二の者を神と復和せしめん爲なり。且來りて、爾等遠き者及び近
き者に和平を福音せり、蓋彼に由りて、我等二の者は、一の神に在りて、父に近
づくを得るなり。故に爾等既に異民、或は他邦の人たらず、乃諸聖徒の同邦の人、
神の家屬なり、爾等は諸使徒と諸預言者との基に建てられたり、イイスス・ハリストス
は自ら其隅石なり。此の上に全屋は組み立てられ、次第に築きて、主に於ける聖殿と
爲る、此の上に爾等も、神に由りて、神の居處として、共に建てらるるなり。

(比較用 口語訳) キリストはわたしたちの平和であって、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、ご自分の肉によって、数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄したのである。それは、彼にあって、二つのものをひとりの新しい人に造りかえて平和をきたらせ、十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と和解させ、敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである。それから彼は、こられた上で、遠く離れているあなたがたに平和を宣べ伝え、また近くにいる者たちにも平和を宣べ伝えられたのである。というのは、彼によって、わたしたち両方の者が一つの御靈の中にあって、父のみもとに近づくことができるからである。そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。このキリストにあって、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し、そしてあなたがたも、主にあって共に建てられて、靈なる神のすまいとなるのである。

【アリルイヤ 主日第7調】

司祭) なんぢ へいあん 爾に平安、

誦經) なんぢ しん 爾の神にも、

司祭) えいち 睿智、

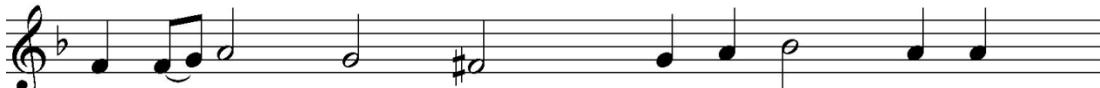
誦經) アリルイヤ、





ア リル イ ャ。

誦經) 至上者よ、主を讃榮し、爾の名に歌うは美なる哉、

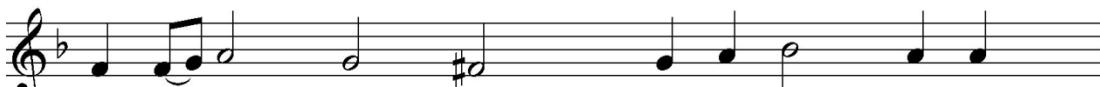


ア リル イ ャ、ア リル イ ャ、



ア リル イ ャ。

誦經) 爾の憐を朝に宣べ、爾の眞を夜に宣ぶるは美なる哉、



ア リル イ ャ、ア リル イ ャ、



ア リル イ ャ。

司祭) (黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思念

めひら なんぢふくいん おしえ さと たま わうち なんぢふく いましめ
の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢよろこ ところ
畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
を思い且つ行いて、屬神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

なんぢ わ たましい からだ こうしよう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん
爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン
福音經 ルカ福音書53端 10章25~37節 】

司祭) えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん
睿智、肅みて立て聖福音經を聽くべし、衆人に平安、



なんぢのし神んにも。

司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聽くべし、彼の時一の律法師イイススに就きて、彼を試みて曰えり、師よ、
 われなに な えいえん いのち つ かれ これ い りっぽう なに しる なんぢいか
 我 何 を爲して 永遠の生命を嗣がんか。彼は之に謂えり、律法に何をか録せる、爾如何
 よ こた い なんぢこころ つく たましい つく ちから つく おもい つく しゅ
 に読むか。答えて曰えり、爾心を盡し、靈を盡し、力を盡し、意を盡して、主
 なんぢ かみ あい またなんぢ となり あい おのれ ごと これ い
 爾の神を愛せよ、又爾の鄰を愛すること、己の如くせよ。イイスス之に謂えり、
 なんぢ こた ところただ これ な すなわち しか かれ おのれ き ほつ
 爾の答えし所正し、之を爲せ、乃生きん。然れども彼は己を義とせんと欲して、
 い わ となり だれ こた い あるひと
 イイススに謂えり、我が鄰とは誰ぞや。イイスス答えて曰えり、或人イエルサリムよりイエ
 リホンに下る時、ぬすびとあかれらそのころもはかれきずほとんじ
 くだとき ぬすびとあかれらそのころもはかれきずほとんじ
 して、彼を捨て去れり。適一の司祭是の路より下りしが、彼を見て、過ぎ去れり。同
 じくレヴィトも彼処に至り、近づきて彼を見て、過ぎ去れり。惟或サマリヤ人は行きて、此
 いたかれみあわれつそのきずあぶらさけそそこれつつかれおのれか
 に至り、彼を見て憫み、就きて、其傷に油と酒とを沃げて、之を裏み、彼を己の家
 ちくのりょかんひいたかれかんごあくるひゆときぎんにまいいだ
 畜に乗せ、旅館に引き至りて、彼を看護せり。明日行かんとする時、銀二枚を出し、
 あるじあたこれいこひとかんごついえもこれまわれかえときなんぢ
 館主に與えて、之に謂えり、此の人を看護せよ、費若し之より益さば、我返る時爾に
 つくのこさんにんうちなんぢいづれぬすびとあものとなりおもかれいこひと
 償わん。此の三人の中、爾孰を盜賊に遇いし者の鄰と意うか。彼曰えり、此の人
 あわれみほどこものかれいゆなんぢかごとおこな
 に矜恤を施しし者なり。イイスス彼に謂えり、往きて、爾も是くの如く行え。

(比較用 口語訳) ある律法学者が現れ、イエスを試みようとして言った、「先生、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」。彼に言われた、「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどう読むか」。彼は答えて言った、『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。また、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』とあります。彼に言われた、「あなたの答は正しい。そのとおり行いなさい。そうすれば、いのちが得られる」。すると彼は自分の立場を弁護しようと思って、イエスに言った、「では、わたしの隣り人とはだれのことですか」。イエスが答えて言わされた、「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った。するとまたま、ひとりの祭司がその道を下ってきたが、この人を見ると、向こう側を通つて行った。同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきたが、彼を見ると向こう側を通つて行った。ところが、あるサマリヤ人が旅をしてこの人のところを通りかかり、彼

を見て気の毒に思い、近寄ってきてその傷にオリブ油とぶどう酒とを注いでほうたいをしてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。翌日、デナリ二つを取り出して宿屋の主人に手渡し、『この人を見てやってください。費用がよけいにかかったら、帰りがけに、わたしが支払います』と言った。この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか』。彼が言った、「その人に慈悲深い行いをした人です」。そこでイエスは言われた、「あなたも行って同じようにしなさい」。



しゅよ、こうえいはなんちにきし、こうえい
主 光 榮 爾
はなんちにきす。
爾

※ 聖体礼儀③ (金口イオアン) へ